

文学研究(近代)

永井 善久

筆者に与えられた課題は、2012年の日本近代文学研究における表現学関連分野の研究動向の報告である。ちなみに、2011年を担当したのは深津謙一郎氏だった(『表現研究』第95号)。深津氏は学会誌の編集委員を務めた御自身の経験に基づき、近代文学研究の主潮が「文化研究」にあり、文学テキストの表現機構をめぐる研究は衰退気味であることを的確に指摘している。つまり、文学テキストを特権的に扱うのではなく、同時代言説のなかで相対化し、そのイデオロギー性を剔抉する類の研究が主流となっているというのである。

2012年もこのような潮流はさほど変化していないと思われる。象徴的な出来事が、日本近代文学会の11月例会、「文学研究というシステムを問い直す」と銘打たれた特集である。研究者が自らの特権性に無自覚なまま、文学テキストの分析に没頭することは許されない——まさにそのようなコンセンサスが定着したかのようなイヴェントであった。

以下、深津氏が言及していない「文化研究」に属するここ数年の主な研究を振り返ってみよう。まず曾根博義氏が、「同時代言説病症候群」(『国語と国文学』2007・5)と嘆いた(?)研究の極北、五味渕典嗣『言葉を食べる』(世織書房、2009・12)を取り上げよう。1920年代の谷崎潤一郎の小説テキストを、同時代言説編成に半ば強引に関連付け、その可能性を探り出そうという意欲的な

仕事で、その研究方法の是非をめぐり活発な議論がなされた。また作家神話を相対化するカノン批判としては、松本和也『昭和十年前後の太宰治』(ひつじ書房、2009・3)が刺激的だった。「実体(論)的な太宰治」を徹底的に斥け、同時代の言説編成のなかで太宰の小説テキストを読み込む松本氏の仕事は、五味渕氏の方法と共通するところが少なくないと思われる。2012年の研究書に限ってみれば、笹尾佳代『結ばれる一葉』(双文社出版、2012・2)なども、作家表象のイデオロギー性を分析した仕事として興味深い。

以上、長々と表現学分野からは離れた研究を紹介してきたが、近代文学研究(散文)について言えば、このような「文化研究」的な動向が今後も主流をなすと思われる。

しかしながら、2012年にはストイックに小説テキストの表現について考究する書籍も、学界を牽引する二人の泰斗により上梓された。中村三春『花のフラクタル』(翰林書房、2012・1)は、20世紀の前衛小説を「単純にイデオロギーや時代性によって裁断」することなく、テキストの表現の可能性を精緻に分析している。また安藤宏『近代小説の表現機構』(岩波書店、2012・3)は、「小説が「小説」であるための仕掛けや仕組み」＝「表現機構」の変遷を通史的に論じた書である。上記二著の紹介をもって、与えられた課題に対するささやかな報告としたい。

(明治大学)